数多のチャンネルがしのぎを削る動画配信サイトは、今や老若男女問わず多くの人々が利用する一大娯楽産業である。そこにひしめく多様なジャンルの中、近頃賑わっているのが廃墟探索系のチャンネルだ。暗い廃墟を進むスリリングな絵面と、配信者のオーバーなリアクションが大衆にウケたのが流行のきっかけだが、最近は悪い意味で話題が尽きない。

配信者が続々と参入し始めたことでマナーが低下し、無断侵入や器物損壊などの炎上騒ぎが続いたのである。特に問題視されたのは、ウケ狙いの素人が安易に危険な場所に踏み込んで事故に遭うケースで、ときにニュースで社会問題として報道されるほどだった。
多くは単なる遭難で、後に保護されているとのことだが、不可解なのは、まるで神隠しのように消えた配信者がかなりの数存在すること。実際、生配信や取材中に行方不明となった配信者は数知れず、それが憶測を呼び世間の関心を集めていた。

警察の捜査が何ら実を結ばない中、一連の神隠し騒動の真相に辿り着いた者がいた。彼は某市の小学校に通う平凡な少年だが、一週間前、神隠しの現場に居合わせながらも、生還することのできた幸運の持ち主であった。
彼の脳裏に焼き付いているのは、今でも信じがたい、件の夜の光景だ。

この日、全国の廃墟を回っている有名配信者の男性【ルイン】が、多発する神隠しの謎に迫るというというライブ企画で、少年の住む地域を訪れるという予告を行っていた。そのことは学校でも話題となっており、彼はクラスメイトに自慢するため、ルインの配信を近くで見物しようと企んだ。
そして彼は夕食後に家を抜け出し、土地勘から国道沿いの林内の廃墟が配信の舞台だろうと目星をつけて、ルインを待ち伏せしたのである。

結論から言えば、配信者ルインは読み通りそこに現れ、軽妙なトークとともに、元ドライブインの廃墟に足を踏み入れていった。そして、直後に生配信は途切れ、二度と戻ることはなかった。

そこから先は、息を潜めながらルインの背中を追っていた少年のみが知る。

廃墟に踏み入ったルインは、中央の広間に差し掛かったところで真新しい人の生活の痕跡を見つけ、不法占拠がどうのと蘊蓄を垂れていた。だが次の瞬間、奥からその主が現れ、間髪を入れずルインに襲い掛かってきた。
不意の一撃で撮影機材を瞬時に潰され、そのまま壁に叩き付けられて意識を失うルイン。人間離れした力で彼を昏倒させたのは、薄汚れたブレザーに身を包んだ、発育の良さが目を引く少女。その容姿はともかく、続いて彼女がとった行動を目の当たりにして、少年は、

彼女こそがこの地域で起きている事件の犯人であると確信した。
　少女は気絶した侵入者……ルインの両肩を掴んで手繰り寄せ、喰い始めたのである。喰うと言っても、獣のように肉を貪るわけではない。彼女は冷淡な眼差しで大口を開け、蛇のように相手を呑み込もうとしていたのだ。いくら彼女が大柄な方だといっても、相手はそれより大きい成人男性。いささか無理があろうと思われたが、彼女に人間の常識は通用しなかった。縦横に自在に開くその口はルインの体を容易く咥え、肩も、腰も一切引っかかることなく呑み込んでいく。そして一際大きい嚥下音が鳴ると、開け放たれた少女の胸元を人型の膨らみが一気に通過し、直後にその腹は一抱えほどもある大きさに膨れた。妊婦を遥かに超える腹回りと、表面に浮かんだ生々しい凹凸は、彼女が人間を丸呑みしたという事実を強く印象付ける。

　我が目を疑う凄惨な光景に少年は狼狽し、強い後悔の念を抱いたが、同時にある感情が芽生えていることにも気付いた。それは、ある種の昂りと欲求である。

　動揺を隠せないでいた少年だったが、幸い物陰で息を殺していたため相手に気取られることはなく、この夜、彼はそのまま逃げおおせることに成功した。

　しかし、その日以来、彼の頭には、形容しがたい悶々とした欲望が巣食うこととなった。ルインの行方不明事件を耳にする度にあの夜の光景がフラッシュバックし、少女に丸呑みされた彼の、おそらく悲惨な末路を想像して、興奮している自分がいたのだ。ひとたび思い出してしまうと、勉強も遊びも何ら手に付かない。願わくはあの時の刺激をもう一度、と脳が禁断症状を起こしているようだった。

　そして件の夜から一週間経った日曜日の昼下がり。いよいよ欲望の捌け口が無くなった少年は、ある決意をして荷物をまとめ、例の廃墟へ足を運んでいた。あの日、たしかに彼女はここに居た。そして今日はその彼女に会いに来た。少年は逃げも隠れもせず、動悸を堪えながら扉を丁寧にノックし、真正面から廃墟へ踏み込んだ。

　心配していた不意打ちはなく、館の主はフロアの奥で椅子に腰掛け、警戒した様子でこちらを睨んでいた。
「子供一人……ストリーマーには見えないけど、こんなとこに何しに来たの？」
「わざわざノックしてきたってことは何かあるんでしょ？」
「ねぇ、ボーっとしてないで答えてよ」
身構えていた少年に対し、少女は思いのほか常識的な言葉を掛けてくる。本性を現すことなく穏便に済ませるつもりだったのだろうが、少年は彼女の裏の顔を知った上で会いに来ている。彼は意を決して本題を切り出し、あの夜の記憶と、自らの願望を打ち明けた。

「ふーん、変なのが来たとは思ってたけど、まさかカワイイ顔して本物の変態だったとはねー」
「せっかく助かったのに、自分から食べられに戻ってくるなんてヤバすぎでしょ。あたしとしては助かるけどさ……」
　あの日、自分が人を丸呑みしている現場を目の当たりにした少年が劣情を拗らせ、遂には自ら食べられに来た。少女にしてみれば、困惑するのも無理のない話である。しかし少年がそのことを口にしたのを境に、彼女から人ならざる部分が見え隠れするようになった。
「……悪いけど、これじゃ生きて帰すわけにはいかないね。覚悟はいい？」
刺さりそうなほど鋭い朱の眼光は、蛙を睨む蛇のそれ。少年は圧倒されながらも、決意を示すように持参した大きなリュックサックを下ろし、差し出す。そこには、家から持ち出してきたアウトドア用品や、貯金箱が詰まっていた。
「なるほど……これと引き換えに食べてくださいってやつ？」
「律儀だねー。こんなの無くたって、子供なら喜んで食べてあげるよ」
「ふーん、結構いい道具揃ってるじゃん。これからの時期助かるかも」
「それにしてもこの貯金箱、重たいねー。これ全財産でしょ？　覚悟決まりすぎ……」
目ぼしいものを取り出し終えた少女は、少年の覚悟を汲んでか、少し頬を緩ませて答える。
「あたしのことはリサって呼んで。まぁ食べちゃうまでの間だけど」
彼女が名乗ったのに応え、少年も名を明かす。
「へー、いい名前だね。美味しそうじゃん」
打ち解けた雰囲気を見せつつも、捕食者としての側面を滲ませるリサ。そして和やかな雰囲気も束の間、彼女は上半身を乗り出して小柄な少年に迫り、告げる。
「それじゃ、服脱いで」
突然の指示に戸惑う少年。しかしリサは有無を言わさず襟元に手をやり、その服を剥ぎ取りはじめた。
「いつもは無理やり食べちゃうからこんなことしてられないけどさ、正直こっちの方が助かるんだよね」
「そんな顔しないでよー。キミだって美味しくツルンと食べられたいでしょ？」
半ば力づくで全身の着衣を脱がされ、生まれたままの姿となった少年。彼は赤面して手で顔を覆っていたが、間近に迫ったリサによってその両手が除けられる。
　彼女はそのまま、たじろぐ少年を弄ぶように、彼の鼻筋から額にかけて赤い舌を這わせた。予期せぬ生温かい感触、そしていささか鼻腔に障る臭気に、少年の肩がビクンと跳ねる。その反応を面白がるかのように、続けて二回、三回と厚い舌が彼の顔を往復する。回数を重ねるごとに動きは大胆になり、少年は糸を引く唾液と蒸し暑い吐息を顔中に浴びることとなった。

　ようやくリサが口を離すと、舌で蹂躙し尽くされ骨抜きになった少年は、トロンとした

目でその場にへたり込む。
「ごめーん、しばらく歯磨きサボってたからクサかったかもー？　っておーい……」
「おーいってばー。聞こえてるー？」
リサに頬をつつかれ、ようやく我に返った少年。彼はたちまち自らの下半身がかつてなく滾っていることに気が付き、慌てて股を閉じようとする。それを見たリサはニタリと笑い、おもむろに手を伸ばしてそれを阻止した。
「男の子食べてるとき、こうなる子はよくいるんだけどさー……そういうのは命の危機で反射的になってるだけだと思うんだよね」
「キミみたいに食べられる前からギンギンにしてんのは相当ヤバいからね？」
「まったく、ちっちゃいとはいえ、こんなに反り返ってちゃ喉に引っかかっちゃうよー？」
冗談めかして窘めたかと思えば、彼女は右手を少年の下腹部に這わせ、屹立したものを躊躇なく掴んだ。
「男の子のコレ、未だにどうなってるのかよくわかんないんだけど……」
「とりあえずあれこれテキトーに触ってみれば何とかなるかなー？」
リサがおぼろげな知識や記憶を頼りに手で包んだそれを扱くと、少年は声を漏らして背筋を震わせる。そして十数秒と経たないうちに限界まで張り詰めていた緊張が暴発し、彼は白濁液を溢しながら全身を何度も跳ねさせた。
「えっ、早っ……なんだぁ、つまんないの」
　拍子抜けした様子のリサが見下ろす中、未だかつて経験のない雷のような快感に打たれた少年は、焦点の合わない瞳でぐったりと壁にもたれかかる。しばし夢現といった様子の彼だったが、うっすらと耳に飛び込んできたリサの言葉が、彼の目を一気に覚まさせた。
「おーい……情けない子は食べちゃうぞー……」
少年が見開いた眼を足元へ向けると、リサが自らの両足首を掴んで束ね、口元へ運んでいるところだった。彼の視線に気付いたリサは、目配せをして食事の開始を告げる。それを見ていよいよ覚悟を決めた少年は、首を縦に振った。するとリサは待ちかねていたように「いただきます」と呟き、少年のつま先に口づけをすると、彼の足を口に含みはじめた。
　普段の彼女の食事は暴れる獲物が相手のため、頭から力任せに呑み込むことが多いが、望んで食べられに来た酔狂な者がいたとなればこの限りではない。リサは貴重な獲物を味わうようにじっくりと唇を滑らせ、足元から数センチずつ小刻みに啜り上げていく。
　踝、脹脛、太腿、生温かい感触は次第に上へと這い上がり、数分がかりで臀部まで達する。興奮のあまり少年の股間は再び熱を持っていたが、リサはそれを意に介することなく咥え、やがて下半身すべてが頬張られてしまった。
　その後も腰、鳩尾、胸と続けて呑まれ、さながら半身浴のようだった感覚は、とうとう全身浴のそれになる。もはや首から上以外自由の利く部位は存在しないが、その圧迫感が寧ろ心地良いのか、少年は恍惚とした表情で虚空を見上げていた。

　その後、大きく開け放たれたリサの口は少年の頭部を収めるに至り、彼の視界は血色の良い粘膜に覆われていく。そしていよいよ彼女がすべてを咥え込んで口を閉じると、ついに光は遮られ、丸呑みの完了を告げる特大の嚥下音が響く。
　刹那、彼の体は窮屈な粘膜の回廊を通って下へ沈み、肉壁の底へと捻じ込まれる。湿った肉の襞に囲まれたそこは、終着点となる胃袋だ。

「さすがにまだ生きてるよねー？　聞こえる？」
粘膜を介して響いてくるリサの声。子供とはいえ人一人を呑んだ直後にもかかわらず、苦しそうな様子はまるでない。
「ちょっと居心地悪かったらゴメンねー。実は昨日の夜も一人食べてたから……」
リサの言うとおり、胃の中は饐えた臭いがきつく、底の方の襞には何かの繊維や髪の毛らしいものが絡んでいる。おそらく、数時間前までここで先客の消化が行われていたのだろう。お世辞にも居心地の良い環境とは言えない状態だが、あの日見た【ルイン】の末路を自分に重ねた少年は、得も言われぬ興奮に駆られ、息を荒くしていた。

「ちょっとちょっと！　あたしのお腹の中で何アツくなってんの？」
「えっキモい！　子供のくせに筋金入りの変態じゃん！」
胃袋の収縮に合わせて伝わってくる、ビクビクとした小刻みな痙攣。内側から妙な感覚を覚えたリサは、怪訝な表情で蠢く腹部を見下ろす。案の定、中の少年は倒錯しきっており、波打つ胃壁に下腹部を擦りつけ、痺れるような快感の中で吐精を繰り返していた。泡立つ胃液と踊る肉壁が自らを消化しつつある中、彼は一回でも多く絶頂を貪ろうと、壊れた玩具のように身を捩らせ続けていたのである。
「はぁ……変な子食べちゃった。もー勝手にしてー……」
リサは半ば諦めたような表情で、不気味にのたうち回るボテ腹を床に投げ出して寛ぐ。
　その後も少年の絶頂の波は幾度となく胃袋越しに伝わり、五回目以降は数えてもいない。しかし回数を経るごとに勢いは衰えを見せ、やがて弱々しい痙攣を最後に、それは完全に途絶えた。遺されたのは、胃液が静かに波立つ音のみである。
「……流石に疲れちゃった？　終わっちゃうとなんか寂しいね」
「……おやすみ」
リサは久々の刺激的な体験に感謝するように、揺れ動く大きな腹を抱き抱える。その中では、度重なる絶頂の果てに意識を失った少年が、穏やかな表情で胃液のプールに沈みつつあった。

　しかし彼もまた、多少印象に残る存在でこそあれ、リサにとって数多平らげた獲物の一人に過ぎない。その日の晩のうちには、彼の姿は跡形も無く消え失せていたという。